

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	物言う意識の発達を知るための調査方法の一つと、その報告
Author(s)	上原, 輝男; 飯住, 良夫
Citation	児童の言語生態研究 , 6 : 7 - 10
Issue Date	1973-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045064">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045064</a>
Right	
Relation	



# 物言う意識の発達を知るための

## 調査方法の一つと、その報告

上原輝男  
飯住良夫

### 一、目的と動機

あくまで手がかりとしての、前段階的基礎資料を得たいための調査であった。しかし、結果的には、期待以上の発見と、動かしがたい発達段階と、その特徴をつきつけられたので、公開する。

先に述べるように、これで物言う意識の全てと考えているわけではない。人間の意識の素地から、その芽生え、あるいはその成長発達など、おそらくわれわれは専門の外にあって、手出しの許されぬことであろう。ただ、われわれに、人間の子に、ことばが介入するとき、単に物理的にのみことばが介入するとは認められないために、ことばが介入するということ、その介在に即応する意識とは、必らず、ことばの介在状況を裏付けるものであるという考えから、何とかその基礎資料を得るための方法を探したかったのである。

われわれは、不用意に、ことばを使用するというようなところからは出発できない。言いかえれば、ことばを使用するものは、使用されるべくして使用しているのであって、ことばの介在状況の在り方を示すという方が適格で、ことばを使用するなどという言い方な

り意識なりは、普通の人間日常生活においては特別のものと言ってよいし、また、われわれが担当する園児及び小学生には特に注意を喚起しない限り無い。にもかかわらず、われわれが担当する国語及び国語科教育における具体的対象や、目的には、ことばの使用に関する上達と育成を何の配慮もなしに考え易い。このことを矛盾として、さもなくば考えの甘さとして、指摘したり、追究されたりした考察を見ないのはどうしてなのだろうか。ことばの使用に関する上達と育成は、ことばを使用する意識に目覚めさせた時だけ可能なのだろうか。またその意識は常時目覚め続けるものと言えるかどうか。ことばを使用している意識がなくても、ことばを使用している時の意識は、ことばの使用の上達と育成とにとって無関係たり得ないことは、ことばにいうまでもないのに。

われわれは、われわれの考察をなるだけ、ことば使用の意識を忘れた、常時の意識状況下で、ことばと意識との接触状態を覗きたいと思った。そしてそれについて、ことばの人間生活への介在を見られるものとして、物言う状況・状態の観察を列挙させる方法を選んだの

である。いわゆる直接法を捨てて、間接法を採ったつもりなのである。(但し、人間の言語活動から言えば、この方が直接であり、基本的であると考えられもするし、実際の、披験者たちは不思議に、ことばを使用する意識からは解放されていたことを付記する)物言う人間のさまざまな状況・状態の観察と記したが、観察の語より知覚の方がよいかもしれない。決してそれは人間の子にとって、人間の物言う言い方に何種類あるかということの学習をしたわけでもないし、物言う術の観察記録がそれぞれの子に意識的に日頃なされていくはずもない。しかし、われわれの着眼は、人間が物言うことの姿を、その子たちが、どの範囲で、どこに焦点を合せて記憶しているか、それが知れば、その子たちの現状下における言語活動の意識の流紋として浮かび上がるとしたことにある。これは、われわれの持論であるけれども、言ってみれば、人間にとってことばは常に何らかの調和ある世界を維持しながら発達する。だからこそ、段階的にその意識世界の流紋の及ぶ範囲と限界とを期待したのである。

二、調査事例の概説

○調査の提示と方法

口頭によって、担任から次の通り指示した  
「言うということばの下に、何かことばをつけるといういろいろな言い方になります。知っているだけ書いてください。」

○調査対象

二年	東京・四谷第一小	25名
三年	町田第三小	36名
四年	横浜・芹が谷小	44名
五年	日吉南小	44名
五年	汲沢小	42名
六年	芹が谷小	42名
	日吉南小	39名

(なお一年は、質問の意を解しがたいという判断から除いた)

○実施年月日 昭和四十七年十月

まず、集録できた全ての語を、正語以外は除去して次に掲げる。(順序は五十音)

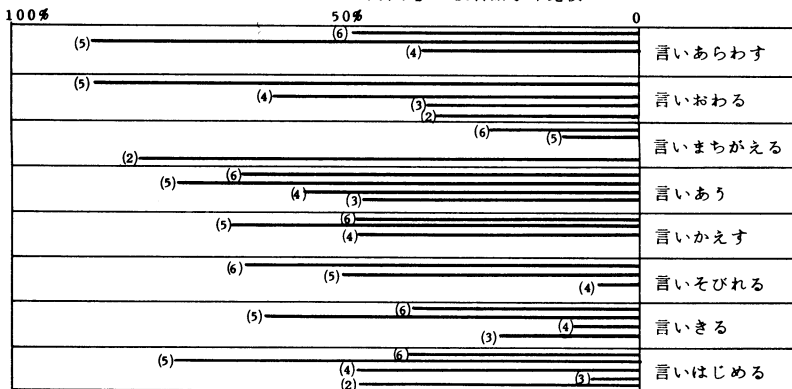
言いあう。言いあきる。言いあらためる。言いあらそう。言いあらわす。言いあるく。言いいえる。言いいおとす。言いいおわる。言いいかう。言いいかえす。言いいかえる。言いいかかぬ。言いいかざる。言いいかける。言いいかす。言いいかねる。言いいかわす。言いいかかず。言いいきる。言いいくわえる。言いいくるめる。言いいこなす。言いいこまかす。言いいこめる。言いいさだめる。言いいしぶる。言いいしらす。言いいすくむ。言いいすぎる。言いいすてる。言いいそえる。言いいそこなう。言いいそびる。言いいそびれる。言いいたい。言いいたす。言いいだす。言いいただす。言いいためらう。言いいちらす。言いいつくす。言いいつける。言いいつたえる。言いいつづける。言いいつまる。言いいつめ

る。言いいづらい。言いいとおす。言いいとく。言いいとがめる。言いいとげる。言いいとまどう。言いいとめる。言いいとばす。言いいなおす。言いいながす。言いいなれる。言いいにくい。言いいにげる。言いいぬく。言いいのがす。言いいのがれる。言いいのける。言いいのこす。言いいはたす。言いいはる。言いいはやる。言いいふくめる。言いいふらす。言いいふるす。言いいまかす。言いいまける。言いいまくる。言いいまちがえる。言いいまわす。言いいまわる。言いいもらす。言いいやすい。言いいよる。言いいわかる。言いいわすれる。言いいわたす。(以上八十四語)

次に調査の目的によって、これらの語の学年別による頻出度をとったのであるが、煩瑣を避けるためと、より特徴的に意識変革を促すために、60%以上の頻出度を示した用語の全てにわたって、その学年を表にしてみた。なお、そのことが飛躍的に行われるか、漸層的であるかを見るために、頻出度の最高位だけでなく、二位三位をも加えた。また、特に、全学年(但し一年は除く)を知る必要のものは任意によって更に加えてある。別表がそれである。一目瞭然たることは、飛躍的にも、漸層的にも五年生が首位を奪っていることである。また、その座を譲っている、「言いいそびれる」と「言いいまちがえる」が、前者を六年生に、後者を二年生にというのも、それぞれ語の性質から考えても納得させるものがあると思う。とにかく、これほど明瞭になると、五年生の段階として、物言う状況・状態に極めて鋭敏に反応し始めることを認めないわけにはいかない。また先述したように、これが直ちに、

別表一

頻出度60%以上の「言う」の複合語学年比較



( )の中の数字は学年をあらわす。

ことばを使用する意識ではないだろうけれども、この調査が、一般生活の中での言語介入ぶりへの意識の留意を求めたことになっておれば、人間成長における五年生の段階への関心をそくられることはもとよりながら、この五年生が選んだ、特に飛躍的頻出度を示す「言いいあらわす」「言いいおわる」「言いいきる」「言いいはじめる」の四語に伴う意識を重要視せねばならないだろう。つまり、生活意識の自然発達の中で、言語介

在への関心の端緒が、これらの語によって示されたということである。

それと比較的に、漸層的頻出度を示すのが、「言いあう」「言いかえす」であって、二位がいずれも四年生であるのおもしろい。四年生の思考優先を思わせるからである。

では、六年生が「言いそびれる」に61%を記録して、その殆んどを五年生にその首位を譲ったということは、どう解釈すべきか。われわれはこの事情を明らかにするために、別表の語以外の、六年生と五年生とが選んだ語についても、その頻出度の高比較べをしてみた。%が低いので、グラフにすることを止め、A・Bにわけて、Aに五年生の方が高い語を記し、Bをその逆とする。( )の中は%の比較、上段五年、下段六年。

A 言いわたす(48・1)。言いまける(14・1)。  
言いこなす(21・2)。言いしらす(10・1)。  
言いもらす(14・2)。言いまわす(10・2)。  
言いわける(21・5)。言いつたえる(50・15)。  
言いたす(17・5)。言いふらす(31・11)。言  
いのこす(50・22)。言いよる(12・5)。言  
いすくむ(2・1)。言いつてる(10・5)。言  
つまる(8・4)。言いおとす(14・7)。言  
さだめる(14・7)。言いあるく(14・7)  
(以上%が倍以上のもの。小計十八語)

A' 言いかかる(10・7)。言いだす(43・33)。  
言いながす(10・7)。言いあらそう(29・26)。  
言いなれる(8・7)。言いすぎる(50・27)。  
言いかえる(36・32)。言いかさす(40・30)。  
言いのがれる(42・40)。言いまわる(8・6)  
(小計十語)

合計二十八語

B 言いくい(0・32)。言いとおす(0・30)。  
言いかねる(0・19)。言いやすい(0・15)。  
言いとげる(0・10)。言いごまかす(0・10)。  
言いはやす(0・10)。言いつめる(0・10)。  
言いあきる(0・9)。言いとがめる(0・9)。  
言いにげる(0・6)。言いとばす(0・5)。  
言いのける(0・5)。言いそびる(0・2)。  
言いづらい(0・2)。言いしぶる(0・1)。  
言いとまどう(0・1)。言いためらう(0・1)。  
言いただす(0・1)。言いふくめる(0・1)。  
言いそえる(0・1)

(以上、五年0%のもの。小計二十二語)

B' 言いつける(48・59)。言いかける(40・48)。  
言いのがす(26・53)。言いわすれる(33・37)。  
言いなおす(24・37)。言いはる(14・22)。言  
いまかす(10・16)。言いつづける(8・12)。  
言いそこなう(8・10)。言いかわす(8・9)。  
言いまくる(2・5)。言いぬく(2・5)。言  
いくるめる(2・7)。(小計十三語)

合計三十五語

以上の如く、このようにA、A'・B、B'丁寧に比較してみると、さすが、六年生は、五年生の道程を経て、六年生なりの発達があるものを感じさせる。要点的に言うと、

一、Bにあらわれた通り、五年生の無回答の語を六年生が二十二語も選んでいること。

二、A群(Aを含む)と、B群(Bを含む)とを比較してみると、五年生・六年生が相互に、押し合った語数からいうと、六年生が優勢であったこと。

三、A'・B'と、それぞれ、率の違わない語を別にしたが、このA'・B'群と、A・B群とは、両者、互

いに、性格的な相違を示すもののように思われること。

四、さらにはA群(Aを含まない)と、B群(Bを含まない)とは、性格的な相違を示すものように思われること。

等が、掲げられる。なお補足すると、一、二に關しては、六年生が、五年生では持たない語彙を、新しく獲得することが特徴的であると言ってよい。頻出度の高さにおいて、五年生にその座を譲っていたのも、実は、六年生は幅広い語彙を求めているという理由が出て来たことになる。また、三、四に關しては、A'・B'語群に、両学年各々の頻出度の高低が見られるけれども、その問題よりも、A'・B'語群に入る語を、A・B語群に入る語とは、性格的に区別がつくように思われることの方が、本調査には意味がある。即ち、A'・B'語群は、言語行為的あるいは一般行動的慣習であるものが多く、それだけに、これらの多くは、五、六年生時に始めて出るのでなく、それ以下の学年時に既出であること。それに比較して、A・B語群は、五、六年生に集中したものであり、B語群は六年生に限られるものということになり、A・B語群ともに、性格的には、感情刺激を特徴とする用語が多く見られる。では、このA・Bに分たしめるものは、何であろう。つまり、Aを五年生が優位に立って選び、Bは六年生のみにして、五年生が獲得できなかったとする理由は求めたいところである。詳説は後考を俟つとして、主観的ではあるが、やはり、感情刺激が、BはAよりも微細に及ぶものと言える。

余断を敢えてするなら、五年には、物言うことに感情を感じつつも、まだ物言う行為目的が消えず、六年では、物言うことに伴う感情刺激に意識が集中してお

り、その目的のために物言うと言えようか。

### 三、物言う意識と語彙

今回の調査結果を待つまでもなく、物言う意識の発達、あるいは転換によって、語彙の選択が変るということは、当然のことであつたらう。しかし、今回の結果を見て、特に言っておきたいことは、児童の発達期にあつては、それほど自由に物言えないことを如実に知らしめられたことである。別の言い方をすれば、それぞれ各学年毎に、特徴的な物言うことに対する関心の渦があつて、その渦中にある語が採択される。それに意識はある集中であるから、その強まりによって局大化されて、それ以外の意識化を妨げる。例えば、二年生で集録された用語は十九語に限られる。そのうち、三〇%以上のものを掲げると、

- 言いまちがえる (80%)
- 言いわずれる (48%)
- 言いおとす (48%)
- 言いかける (48%)
- 言い始める (44%)
- 言い終わる (32%)
- 言いわける (32%)
- 言いつける (32%)

の以上八語であり、いかにも物言う入門期の意識を並べたててみせてくれている。物言うことに基準がありそれに準拠することが先行意識であり、その困難さ及び慎重さを曝している。それが三年生になると、集録語数は三十六となる。但し、三〇%以上のものは依然八語である。四年生では、五十八の九。五年生は、五十五の十九。六年生は七十八の十六。語彙が広がる割りに固執する用語が少い。いや、おそらく意識に即していえば、固執する用語、即ち集中的意識から拡散化

が行われるようになったから、語彙の広がりを見せるのだと説明すべきであらう。しかし、先に述べたように、一挙に拡散するのではなくて、流紋の如くに段階的にその渦を巻きかえて行くようである。

二年生にならい、三年生、四年生の三〇%以上のものを掲げると、

- |    |             |              |
|----|-------------|--------------|
| 三年 | 言いかける (56%) | 言いおわる (57%)  |
|    | 言いあう (44%)  | 言いあう (53%)   |
|    | 言いだす (42%)  | 言いだす (47%)   |
|    | 言いすぎる (39%) | 言いはじめる (44%) |
|    | 言いわける (36%) | 言いかえす (42%)  |
|    | 言いおわる (33%) | 言いつける (42%)  |
|    | 言いかえす (31%) | 言いあらそう (39%) |
|    | 言いかえす (31%) | 言いすぎる (36%)  |
|    | ~~~~~       | 言いかえす (35%)  |

また、この時期なりの特徴を見ることは、決して困難ではない。物を言うのは、言いあいのためとでも思う段階であらうか。おそらくこれにて小学生全学年中最も喧騒の烈しさを裏付けられるであらう。特に、四年で「言いあらそう」が新しく加わることも注目されてよいだらう。意志や思考が、突走っている時代なのかもしれない。

さて、以上によって、大体の考察を終るが、「言う」の複合語を書かせることによって、試みた物言う意識の発達の調査は、果して自然な段階なりの意識かどうか危まれる点もあらう。たとえば、「言いあらそう」の語を書きつけることと、その本人が言いあらそうかどうかは別だといわれることである。しかし、われわれはこれでよかった。むしろ、この間隙を好都合に利用した調査法であつたのだと思つていい。つまり、物言う意識は、物言わしめる状況及び条件をどう見てい

るかということと殆んど区別できないことである。物言う意識は、物言わしめる動力ではない。くだくだしく言えば物言わしめる状況及び条件を、自分はどう見るといふことが、物言わしめる動機であり、動力である場合が多い。物を言うなどといえば、極めて直接的行為のように思われるけれども、所詮言語活動は、間接的行為だと思ふ。ことばを介在せしめているその在り方において、人間は接触している。この限りにおいて、われわれは「言う」の複合語を用い、各々現在において、物言う状況、条件、情状について推察の及ぶところを、物言う意識としたのである。

(玉川大学教授)  
(横浜・芹ヶ谷小・教諭)

